

## シテイル形の表すパーフェクト的な意味

須田 義治 (大東文化大学外国語学部)

Perfect Meanings of *Shiteiru* Forms

Yoshiharu SUDA

## 〈はじめに〉

動詞のシテイル形は、アスペクト的な意味として、「走っている」のような〈動作の継続〉とともに、「壊れている」のような〈変化の結果の継続〉を表す。それが、動作動詞に対する変化動詞という動詞分類と関連していることも、用語の違いはあれ、定説と書いていいだろう。しかし、個々の実例にあたってみると、シテイルの表す〈変化の結果の継続〉が、どのような変種として現れているかは、それほど明らかになっているとは言えない。

そこで、本稿では、シテイル形の表す〈変化の結果の継続〉の意味について、それをパーフェクト的な意味(状態パーフェクト)と規定して、かんたんにはあるが、そのおもな変種をとりだし、記述する。そして、さらに、シテイル形の表す動作パーフェクトの意味の変種についても検討する<sup>1</sup>。

## 1. 状態パーフェクト(変化の結果としての状態)

パーフェクトは、アスペクトやテンスと同じく、時間に関わる意味であるが、動詞の表す動作を二つの時点に関わらせるものである。一つは、動詞の語彙的な意味が表す動作が生じる時点(出来事時点)であり、もう一つは、その動作を時間軸上に位置づける基準となる時点(基準時点)であるのだが、この二つは分離していて、前者の時点が先行し、後者の時点が後続する。そして、前者の、動作が生じる時点に意味的な重点があるものを動作パーフェクトと言い、後者の、位置づけの基準となる時点に意味的な重点があるものを状態パーフェクトと言う。<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 本稿では、関係や特性を表すものはとりあげない。関係や特性については、呉(2016, 2017)参照。

<sup>2</sup> 日本語のパーフェクトについての本格的な研究は、工藤(1989)にはじまる。本稿の「出来事時点」などの用語は工藤(1989)にもとづくものである(ただし、本稿で言う「基準時点」には、「設定時点」という用語が使われている)。

シテイル形の表す〈変化の結果の継続〉は、基準時点に先行する時点に変化が実現し、その結果としての状態が基準時点に存在するのだが、その後続する状態に意味的な重点があり、変化の実現は、ほのめかされるだけなので、状態パーフェクト (resultative とも呼ばれる) であると言える。

### 1-1. 結果的な状態

変化動詞のシテイル形は、以下の例のように、なによりもまず、変化の結果としての一時的な状態、つまり、結果的な状態を表す。シタ (スル形) であれば、変化の実現、つまり、古い状態から新しい状態への移行の実現を表すが、シテイル形では、結果的な状態という移行後の状態を表しており、その状態への移行は背景にしりぞいているのである。<sup>3</sup>

古い状態から新しい状態への移行は、多くの場合、日常的な正常な状態から、通常でない状態への移行である。また、その通常でない状態は、望まれたものもあるが、多くの場合、望まれないものである。

#### 〈物理的な変化〉

- 1) 路面には雪が積もり、轍が凍結している。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 2) 掌が、汗でじっとり濡れていた。(重松清・ビタミンF)
- 3) ぴったりしたアームカバーが、汗を吸収していつのまにか湿っていた。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 4) 「あのさ、おまえのオルゴール、新しいの買ってやるからさ、これ、お父さんにくれよ」「だって、壊れてるじゃん」(重松清・ビタミンF)

#### 〈外形的な変化〉

- 5) 道端の杉の枝が、真っ白な雪を載せて重そうにしなっている。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 6) 多田は手もとの用紙に、通過時刻を記入する。紙は汗ですっかりよれていた。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)
- 7) ノートの表紙は、湿気を吸ってたわんでいた。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)
- 8) 隣を歩く華奢な肩で、セーラー服の紺の衿が風にめくれていた。(恩田陸・夜のピクニック)
- 9) 飾られた箱根駅伝の横断幕が、風をはらんでふくらんでいる。(三浦しおん・風が強く吹いている)

<sup>3</sup> 程度や量を含む変化を表す動詞の場合、次の例のように、部分的な変化が実現しても、さらに、その変化が進んでいくこともある。

ホワイト・グレープ・ジュースの中で静かに氷が溶けている。四つのコップは霜がついて水滴がじりじり流れ始める。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども)

〈生理・肉体的な変化〉

- 10) 湿布を貼った左足は、右足と比べても、明らかに太くなっていた。「うわ、腫れてるよ」(恩田陸・夜のピクニック)
- 11) そう考えて、ひどく疲れていた。(宮部みゆき・言わずにおいて)
- 12) 少し喉が渴いていたが、聡美は断った。(宮部みゆき・言わずにおいて)
- 13) 雨のなかを歩いて身体が冷えていたので、熱いコーヒーは有難かった。(宮部みゆき・言わずにおいて)

〈姿勢・体勢の変化〉

- 14) 清瀬がうずくまっていた。驚いて、走は走り寄った。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 15) 丘の住宅街の裾野あたりで、王子が行き倒れていた。(三浦しおん・風が強く吹いている)

〈消滅〉

- 16) 次の花火はもうはじまらず、ふと我にかえると、男の人の姿はなかった。黒い鞆もない。来た時と同じように音もなく消えていたのだ。(池澤夏樹・南の島のティオ)

以上は、結果的な状態の意味的な変種であるが、以下では、それとは異なる特徴の面から結果的な状態の変種をいくつかあげていく。しかし、これらも、以上のものと同様に、基本的に、シテイル形のアスペクト的な意味に特に変化をもたらすものではない。

上の例は、ある原因で起こってくる変化の結果というものだが、次の例は、人による意図的なはたらきかけ(「沸かす」)の結果としての変化である。

- 17) 電気ポットのお湯も沸いている。早苗はココアを三つ淹れて三人に渡した。(有川浩・三匹のおっさん)

次の例は、上にあげた例の表す可逆的な変化の結果としての一時的な状態とちがって、もとに戻らない不可逆的な変化の結果的な状態を表すものである。

- 18) 「サメは時々死んだふりをする。油断していて、カヌーの上で足を噛み切られた奴がいる」  
ほくはぎくっとして、つい一歩、後ろへさがった。「大丈夫だよ。こいつは本当に死んでいる」(池澤夏樹・南の島のティオ)
- 19) 長さが一・五メートルほどで、根の方が三本に分かれ、幹の先は折れている。「これはいい枝ぶりよ」とアサコさんは言って、ほくたちはやれやれと安心した。(池澤夏樹・南の島のティオ)
- 20) 江原はいうと、さっさと埜村のことなど無視して焼き肉を食いはじめる。(中略)「おい、

立花、焦げてるぞ」(池井戸潤・下町ロケット)

次の例は、日常的に何度も交替する状態であり、結果的な状態というより、物が一時的にとる様態を表すものと言える。

- 21) 多田は放置自転車をかきわけるようにして、発券所のまえに立った。営業時間はとうに終わり、シャッターが下りていた。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)
- 22) 日が暮れるのがずいぶん早くなり、街灯にも通りに面した窓にも、すべて明かりが灯っていた。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)

次の例は、長い時間かかって生じた変化の結果としての状態を表しているが、ずっと以前の状態との比較において、現在の状態が異なっていること、特に、正常な状態が異常な状態に変わったことを表している。

- 23) いつ調律をしたのか把握していないというアップライトピアノは、黒い艶を失って、天板も前板も白く濁っていた。(宮下奈都・羊と鋼の森)
- 24) 古いアパートだから、敷居からして歪んでいる。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)

## 1-2. 配置状態

以下の例は、二格の名詞のさしだす場所と、ガ格の名詞のさしだすものとの一時的な空間的な関係を、おもにその様態を描写しながら、表している。これも、いくつかの意味的な変種をとりだすことができる。

### 〈出現後の状態〉

- 25) 多田は食べ終わったカップラーメンを片づけ、駐車場へ愛車を見にいった。助手席のドアに大きなすり傷ができていた。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)
- 26) テレビ画面には、すぐそこまで来たユキが映っている。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 27) 機械の掘った細長い穴にラジオが落ちてしまったのだ。穴の底には雨の水がたまっていた。(池澤夏樹・南の島のティオ)
- 28) 親指のつけ根にできたマメが、べろりと剥けて血がにじんでいる。(三浦しおん・風が強く吹いている)

### 〈ありさまの状態〉

- 29) 滑らかな水面の向う、二〇〇メートルほどのところに飛行機が見えた。半分くらい水に漬かっているが、沈んではいない。上手に水面に着水して、勢いで水面を走り、そのまま平

らな珊瑚礁に乗り上げたらしい。(池澤夏樹・南の島のティオ)

- 30) スポーツバッグのなかには、盗んだ漫画が大量に入っていた。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 31) こぢんまりしたショーケースのなかには、箱詰めにしたものも並んでいた。(宮部みゆき・聞こえていますか)

〈付着後の状態〉

- 32) 佃も覗き込んだ。拡大鏡で目視できるギリギリの大きさの粒子だ。それがフィルタの表面に付着している。「これは細かい」(池井戸潤・下町ロケット)
- 33) なぜなら、このセーターには、大浦道恵さんの髪の毛がついているかもしれないからだ。(宮部みゆき・裏切らないで)
- 34) ハンカチに包んであり、そのハンカチには「ミツコ」の匂いがしみついていた。(宮部みゆき・私はついてない)

〈移動／到達後の状態〉

- 35) 近づくと横倒しになったママチャリである。カゴからスーパーのレジ袋が飛び出し、買い物の中身が辺りに散乱している。(有川浩・三匹のおっさん)
- 36) 彼女は美容院に行ったばかりなんですよ。もし、いったんこの部屋に戻ってきてからまた出掛けたなら、室内に同じような細かい髪が落ちているはずです。(宮部みゆき・裏切らないで)
- 37) ほくたちがビーチに行ってみると、もうずいぶんたくさんの人たちが集まっていた。(池澤夏樹・南の島のティオ)
- 38) 「なんだ。帰ってたのか」「今、帰ってきたところさ」(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども)
- 39) ジョージとキング以外は、全員が大手町に着いている。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 40) 軽トラックは常夜灯に照らされ、いつもの場所に停まっていた。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)
- 41) 呼ばれて振り向くと、自転車を猛然と漕いで、葉菜子がやってきた。後ろの荷台には、本屋の老婦人が乗っている。(三浦しおん・風が強く吹いている)

### 1-3, 再帰的な状態

次の例は、他動詞によってさししめされる対象に対するはたらきかけの動作が、主体の外に出ることなく、主体の領域内にとどまる、あるいは、主体に戻ってくるものである。このような再帰的な動作は、主体の観点からは変化動詞のようになり、シテイル形で結果的な状態を表す。

〈体の部分の変化〉

- 42) 女は事務所に入ってくるなり、元気よく自己紹介した。昼前だというのに、原形をとどめぬほどしっかりと化粧している。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)
- 43) 腰まである長い真っ黒な髪を、頭のでっぺんで二つに分けている。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども)
- 44) 清瀬は青ざめ、ぐったりと目を閉じている。(三浦しおん・風が強く吹いている)

〈体への装着〉

- 45) 誰もいないことを期待してドアを開けると、今日に限って板鳥さんがいた。出先から戻ったばかりなのか、外出用のジャケットを着ている。(宮下奈都・羊と鋼の森)
- 46) エプロンをつけていないばかりか、ドテラのようなものを着て、ペダルを回転させる足には健康サンダルを履いている。(三浦しおん・風が強く吹いている)

〈身体的な所持〉

- 47) エレベーターを下りた走は、廊下で一人の男とすれちがった。三十代後半で、手には底の広い黒い鞆を提げている。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 48) 俺、冷湿布持ってる。サポーターあるんだろ？(恩田陸・夜のピクニック)
- 49) 後ろではヨランダがぼくの身体をしっかりとつかんでいた。(池澤夏樹・南の島のティオ)

#### 1-4. 心理・認識的な状態

認識や判断など、人の心理・認識的な状態の変化を表す他動詞も<sup>4</sup>、シテイル形で、その結果的な状態を表すので、目に見える形で結果が残っているわけではないが、これも状態パーフェクトと言えるだろう。たとえば、例50であれば、先行するある時点において、「覚える」という変化が生じ、そのあと、その記憶を保持した状態が、結果として発話時に残っているのである。このように、認識や判断の成立が、基準時点に先行する変化の実現とみなされるわけだが、それがはっきりしていなければ、状態の持続という意味を表す、非パーフェクト的なものとも解釈される。

〈記憶〉

- 50) 初めて調律に行った日のことはよく覚えている。(宮下奈都・羊と鋼の森)
- 51) 俺もちょうど湯河原のことを思い出していた。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども)
- 52) まず、お席入りから忘れている。半開きの障子をカラリと開けて、すたすた乗り込もうとしたら、やり直しと一喝された。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども)

---

<sup>4</sup> 〈判明〉を表すものなど、自動詞の場合もある。

〈認識〉

- 53) 西脇融が、思いのほか女子に人気があることには気付いていた。(恩田陸・夜のピクニック)
- 54) でも、家内はそれも嘘だと見抜いていたようです。(宮部みゆき・言わずにおいて)
- 55) 私の態度の微妙な変化を、感じとっていたのでしょうか。(宮部みゆき・言わずにおいて)

〈判明〉

- 56) 幸い、脳みその出来が悪くないことは、学校生活を送っているうちに判明していた。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 57) これが選手としての最後の走りになると、ニコチャンはわかっていた。(三浦しおん・風が強く吹いている)

〈理解〉

- 58) キーデバイスの内製化方針は、君も理解していると思う。その原則を破るのか。(池井戸潤・下町ロケット)
- 59) 君は勘違いしているようだが、宇宙航空分野における真の競争相手は、佃製作所ではない。アメリカであり欧州であり、ロシアだ。(池井戸潤・下町ロケット)
- 60) 良は誤解している。落語がしゃべれるからって、日常会話の指導なんてできない。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども)

〈判断〉

- 61) 「わかった。だが、練習でうまく体を絞れなかったら、俺はダイエットするからな」  
「夏には確実に絞れるはずだと計算していますが」(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 62) ここまでの練習は万全だと確信していたが、それでも毎晩寝るまえに、さまざまな思いが脳裏をよぎった。(三浦しおん・風が強く吹いている)

〈予想〉

- 63) 就職活動をするから、住人のための食事作りをやめたいとか、そんなことだろうと、だれもが予想していた。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 64) だから、おや、と思ったんだよ。この女性は、今夜この時刻、急き込んでドアをノックする男がいたら、それは警察の人間であるはずだと予測していたんじゃないかな——とね。(宮部みゆき・裏切らないで)

## 1-5. 客体的な状態パーフェクト

次の例では、動作の対象が「は」や「も」などでとりたてられ、その対象の結果的な状態を、他動詞のシテイル形が表している。これは、シテアル形の意味に近い客体的な状態パーフェクトと言

えるが、あとに述べる動作パーフェクトとも連続的である。

- 65) 則夫と祐希が外で縛り上げた若者——それこそ祐希と同じか年下くらいの犯人を連れてくる頃には、家庭科室の中でダウンしていた連中も清一と重雄で全員縛り上げていた。(有川浩・三匹のおっさん)
- 66) タイトルと出演者の名前は、寄席文字の字体を真似ていた。ワープロで打ったと思われる正確な地図を載せ、余白には矢絣の模様をあしらって、藍色の彩色を施していた。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども)
- 67) 二区は各大学が、エースまたはエース級の選手を投入しています。(三浦しおん・風が強く吹いている)

## 2. パーフェクト的な意味を表さない用法

### 2-1. ただの状態（非結果的な状態）

次の例のような、天候や外形を表すシテイル形は、先行する変化のない単なる状態を表している。これは、物の特性を表す形容詞に意味的に近くなる。

〈天候〉

- 68) いい天気だった。空気は冷たく乾燥しているが、ひなたのベンチにいれば、寒さに震えるほどではない。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)
- 69) 空気が澄んでいると、遠くに丹沢の山並みと富士山が視認できるのだが、その朝は霞がかっていた。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 70) 風はほとんどなく、晴れているが、ムサにとってはつらい寒さだ。(三浦しおん・風が強く吹いている)

〈外形〉

- 71) たぶん四十歳くらいなのだろう。背が高くて痩せているけれども、手が大きくて、力もある。(池澤夏樹・南の島のティオ)
- 72) まずい造作だ。眉はゲジゲジだし、鼻は巨大だし、口は切りそこなった蒲鉾のように歪んでいる。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども)

次の例のように、人の一時的な状態でも、変化の実現という特徴がほとんどなくなる場合がある。この場合、時間的な長さを表す文の成分をとらない、ある期間の状態の意志的な維持を表すことができる(例74, 75)。



- 73) その男は、真夏の強い陽差しを照り返すアスファルトの路上に立っていた。(宮部みゆき・返事はいらぬ)
- 74) 手を合わせることも、頭を垂れることもせず、太陽が中天に近づくまで、多田はしばらく墓石のまえに立っていた。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)
- 75) 行天は動揺も傷心もうかがえない表情のまま、しばらく黙っていた。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)

次の例は、物の一時的な存在を表すものとも言えるが<sup>5</sup>、シタの形で、実際に起こった変化を表さないため、結果的な状態を表すとは言えないものである。すなわち、「箱が転がっている」は「箱が転がった」結果としての状態ではなく、その時点での箱の存在様態を形象的に描写するものと言えらる。

- 76) サイドブレーキを引いて、後部座席を振り返る。ほんとうだ。座席の下に、包装された小さな箱が転がっている。(宮下奈都・羊と鋼の森)
- 77) 開け放した窓の向こう。春の夜空に、たしかに朧月が浮かんでいる。(三浦しおん・風が強く吹いている)

## 2-2. 活動への従事（非状態的なもの）

形式的には変化動詞のシテイル形であるが、結果的な状態というより、何らかの活動状態に入り、それに従事していることを表すものがある。

以下にあげる例の、〈特定の場所における活動〉は、二格の名詞のさししめす場所において行われる活動に携わっていることを、シテイル形が表し、〈移動の目的としての活動〉は、動作を表す二格の名詞が移動動詞と組み合わせり<sup>6</sup>、移動して、名詞のさししめす活動を行っていることを表す。<sup>7</sup>

〈特定の場所における活動〉

- 78) 一昨日から病院に入っているんだけど、何の病気がわからない。(池澤夏樹・南の島のティ

<sup>5</sup> 例 73 は、同様に、人の一時的な存在様態を表すものと言えらる。

<sup>6</sup> 動詞が移動動詞でない例もある。

いじめにはクラスの女子が全員加わっているらしい。(重松清・ビタミンF)

<sup>7</sup> 次の例も、〈外出〉という活動を表していると言えらる。

十月はお茶会の盛んな月で、ばあさんは今日も正装で出かけていた。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども) また、次のような他動詞の例も、パーフェクト的な意味から、活動の依頼の維持などを表すようになってる。俺ア、めったにないから。金払って、ここの管理を頼んでるんだ。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども) 「ドルネシア」のオーナーも彼女の父親なのだが、若者の店だからと、経営を娘に任せているのだった。(宮部みゆき・ドルネシアによろこそ)

オ)

79) すみません。今、お風呂に入ってるんです！(宮部みゆき・裏切らないで)

80) 「神童の具合はどうだ」

「いまトイレに行ってる。あ、戻ってきた。替わるよ」(三浦しおん・風が強く吹いている)

〈移動の目的としての活動〉

81) すみません。今、手を洗いに行ってます。すぐ戻りますから。(宮下奈都・羊と鋼の森)

82) 他大の女の子がたくさん応援に来てるし、今日は走るぞ、ジョージ！(三浦しおん・風が強く吹いている)

83) いま、ハイジさんが庭にシソを摘みにいってくれてる。(三浦しおん・風が強く吹いている)

### 3. 変化の実現（状態パーフェクトから動作パーフェクトへ）

変化を表す動詞は、多くの場合、おもにシテイル形で結果的な状態を表すが、そうでない場合もある。結果的な状態も表してはいるが、重点は、その結果的な状態ではなく、古い状態から新しい状態への移行のほうにあるというものである。

#### 3-1. 状態の変化

状態を表す形容詞と「なる」との組み合わせは<sup>8</sup>、シテイル形で、基本的に、その移行がすでに実現したあとの結果的な状態を表している。たとえば、「暗くなっている」は、「暗い」とは違い、明るい状態から暗い状態への移行が実現し、その結果としての「暗い」を表しているのである。

しかし、それと同時に、この種の動詞の場合、「なる」という動詞の語彙的な意味のためか、他の変化動詞よりも、変化の実現という意味がより強く表されている。つまり、「暗い」状態が、先行する「明るい」状態との対比においてさしだされているのである。

84) なんとか岡を納得させ、一日がかりの仕事から解放されたときには、あたりはすっかり暗くなっていた。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)

85) 日はすでに翳っていたが、駐車場に停めた白い軽はずいぶん暑くなっている。(宮下奈都・羊と鋼の森)

86) よくわからないけど、ハイジさんが弱気になっている。(三浦しおん・風が強く吹いている)

<sup>8</sup> 「赤らむ」「薄らぐ」のように、「赤い」「薄い」などの形容詞から派生した動詞もある。

記録会に出ることへの、恐怖やためらいは薄らいでいた。(三浦しおん・風が強く吹いている)

主張されている相手は加賀美たちの属している捜査班の班長で、寒さと不機嫌のために、顔が赤らんでいた。(宮部みゆき・裏切らないで)

二格の名詞と「変わる」との組み合わせも同様である。名詞のさししめず状態に移行し、その状態にあることを表しているが、変化の実現が比較的強くほめかされる。

- 87) 最初のハイペースから、やや抑え気味に変わっている。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 88) 孝夫を見つめるまなざしは、いつのまにか撫然としたものに変わっていた。(重松清・ビタミンF)
- 89) 幹は黒く濡れ、山は一晩のうちに、単色のうつくしい世界に変わっていた。(三浦しおん・風が強く吹いている)

### 3-2. 量や程度の変化

次の例は、量や程度の変化を表す動詞が、シテイル形で、「少ない」や「高い」といった、変化の結果的な状態を表しているのだが、動詞の語彙的な意味がおもに変化に重点をおいているので、古い状態から新しい状態への移行の意味が強くなっている。

- 90) 相手は所詮中小企業だ。ウチとの訴訟が響いて売上は激減しているらしい。半年から一年で確実に行き詰まる。(池井戸潤・下町ロケット)
- 91) 運動会のあとは二人の口数じたいが極端に減っていた。(重松清・ビタミンF)
- 92) 夜になって、急激に気温が下がっていた。(宮下奈都・羊と銅の森)
- 93) 早くも校庭は照り返して気温が上がっていた。(恩田陸・夜のピクニック)

### 3-3. 比較の構文

動詞の意味的なタイプだけでなく、次のような比較の構文になると、シテイル形が結果的な状態を表さず、単に、変化が起こったということを表すようになる。それでも、シタでなく、シテイル形が使われているのは、それを話し手が確認しているということからだろうか。以前の状態と現在の状態との違いを、話し手が発話時において対比的に確認しているのである。

変化の幅を示す成分をとまなう場合もこれと同様である。

- 94) 清瀬のタイムは、十四分二十一秒五一だった。練習初日に計ったタイムよりも、格段に早くなってはいる。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 95) ちと客が減ったか？そう思って椅子の数を数えて見ると、最初のころより確かに椅子の並びが減っている。(有川浩・三匹のおっさん)
- 96) 二週目は則夫の報告とは店の段取りが少し変わっていた。(有川浩・三匹のおっさん)

〈変化の幅〉

- 97) その月の給料日、祐希の時給は百円上がっていた。(有川浩・三匹のおっさん)

#### 4. 状態パーフェクトと動作パーフェクトの組み合わせ

次の例は、状態パーフェクトと動作パーフェクトの組み合わせである。基本的に、変化動詞のシテイル形で状態パーフェクトを表しているのだが、「すでに」「もう」などをともない、状態の始まり（古い状態から新しい状態への移行）の実現にも重点があり、次に述べる先行性の動作パーフェクトの特徴（側面）も持っている。<sup>9</sup>

「すでに」

- 98) 健児が結婚したいと貴子を連れてきたのは、社会人一年目である。貴子に至っては就職すらしていない音大の四年生。しかも紹介されたときは既に妊娠していた。(有川浩・三匹のおっさん)
- 99) ぶん殴ってやりたいぐらいだが、真野の頬はすでに腫れ上がっている。(池井戸潤・下町ロケット)
- 100) 四時少し前に職員玄関へ行くと、その人はすでに来ていた。(宮下奈都・羊と鋼の森)

「もう」

- 101) 風通しのいい軽トラックで、由良をマンションまで送った。両親はさすがにもう帰宅しているようだった。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)
- 102) 「生憎、もう結果は出ているんでね」取り付く島もない返事を寄越した。「お断りします」(池井戸潤・下町ロケット)

「とっくに」

- 103) 日はとっくに沈んでいる。しかし、水平線は明るかった。(恩田陸・夜のピクニック)

#### 5. 動作パーフェクト

シテイル形は、状態パーフェクトだけでなく、動作パーフェクトも表す<sup>10</sup>。状態パーフェクトは、

<sup>9</sup> 「すでに」などがついていない例もある。

医局員側の意見を代表していた医局長は、大学当局の意見が通って後任の教授が決定されたときに、大学を去って、開業した。そのまえに結婚していたが、若い妻は進退にいさぎよい夫の決心を支持したという。(加藤周一・羊の歌)

<sup>10</sup> 次の例のように、動作や状態の過程が、動作や状態の始まりを示す先行する時点と、後続する基準時点を含んでいて、状態パーフェクトとも動作パーフェクトとも言えない特殊なものもある。これは包括的なinclusiveパーフェクトと呼ばれるものだが、長期間におよぶものが多い。

大学進学を機に十八歳で上京し、今年三十七歳、すでに人生の半ば以上を東京で過ごしている。(重松清・ビタミンF)

楽しそうだなあ。俺はさっきから膀胱がおかしくなってるのに。(三浦しおん・風が強く吹いている)

パーフェクトがとらえる二つの時点のうち、後続する時点に重点があるのに対して、動作パーフェクトは、先行する動作に重点がある。

動作パーフェクトについては、筆者は、須田（2010）において、工藤（1989）の記述を参考にして、出来事の時間的な連続のなかのある時点において、それより前に実現した動作をさしだす〈先行性〉と、論理的な関係を持つ文のつながりにおいて、過去の事実をさしだす〈事実性〉という二つの意味に分けた。

しかし、工藤（1989）以前の工藤（1982）では、この事実性にあたるものが、「記録」（過去に実現した運動が、記録として現在残されていることを表わしているもの）と「過去の用法」（過去に実現した運動が現在の状態になんらかのかかわりを持っていることを表わしているもの）に分けられていた（後者は、従来、「経験」と言われていた意味に重なるものである）。そして、前者の例として、「中山種が大室よしのに宛てた葉書きによると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物Xに会っています。」という例が、後者の例として、「これまでに幾つも見ているの。」という例があげられている。<sup>11</sup>

以下では、須田（2010）を少し修整し、先行性と事実性とのあいだに、工藤の言う「過去の用法」という意味をたてる。すなわち、事実性を、工藤の言う「記録」と「過去の用法」の二つに分けるのではなく、「過去の用法」を独立させ、仮に結果性と名づけ<sup>12</sup>、先行性と事実性とのあいだの中間的なものとして位置づけ、動作パーフェクトを三つの意味に分けるのである。

### 5-1. 先行性（出来事のあいだの時間的な前後関係）

先行性は、場面内の時間の流れを構成する一連の出来事のあいだで、その時間の流れの一時点より以前の出来事を挿入するというものである<sup>13</sup>。そのような意味において、これは、まず第一に、出来事のあいだの時間的な前後関係を表すものと言える。と同時に、先行する動作の残す、あとの時点への結果や効力は<sup>14</sup>、そのあとに起こってくる動作に対して、その前提となったり原因となっ

<sup>11</sup> 工藤（1989）でも、この二つの意味は、はっきり示されていないが、それぞれ、「a. 話し手の現在の判断を根拠づける（話し手の判断の理由＝推論の前提となる）過去の出来事をさしだす場合」と「b. 「なぜか」「真実かどうか」など、話し手が現在問題とし、聞き手に説明、解答を求めている過去の出来事である場合」として、とりだされているようである。そして、それらは〈論述的なテキスト〉で使われる〈論理的〉パーフェクトとされ、〈一時的後退性〉として機能する基本的なパーフェクト（筆者のいう先行性）と区別されている（pp.96-97）。

<sup>12</sup> 状態パーフェクトのように、変化の必然的な結果を表すものではないので、「結果性」という名づけは、いささか誤解を生む用語かもしれないが、「効力性」というのも、なじまないのも、仮に「結果性」と呼んでおく。

<sup>13</sup> この意味は、工藤（1989）で、中心的にとりあげられていたもので、一時的後退性（フラッシュバック性）という特徴をもつものとされている。また、この論文では「先行性」という用語も使われているが、それは、本稿とは違い、パーフェクトのもつテンス的な要素とされている。

<sup>14</sup> パーフェクト的な意味の構成要素としての「効力」という規定は、工藤（1989）に見られる。「変化動詞の語彙の意味上、主体または客体に必然的にあらわれざるをえない変化の直接的な結果を〈結果〉といい、運動動詞すべてが表わす偶然的な間接的な結果を〈効力〉とよんで両者を区別することにしよう。パーフェクトは基本的に運動の効力をとらえるのである。」（pp.86-87）

たりして、動作主体を通し何らかの影響をあたえている。たとえば、例104では、先行する時点に行った「花火を用意する」という動作の結果が前提となり、次の「火をつける」という動作を行っているのである。

この動作パーフェクトは、基準時点が過去にも現在にも未来にもおかれ、他の動作との時間的な関係のなかにあるという点においては、状態パーフェクトとも連続的であると言えるが、状態パーフェクトのように、その場面のなかに目に見える形で結果が存在しているわけでもない。そのため、以下にあげるもの以外でも、さまざまな動作を表す動詞がシテイル形でこの先行性の意味を表すことができるのだが、先行する動作は、限界づけられた、ひとまとまりの動作であるのがふつうなので、そのような限界を持つ動作を表す動詞が多くなっている<sup>15</sup>。

〈用意〉

- 104) 男の人は手の中に別の花火を用意していた。すぐにそれに火をつけた。(池澤夏樹・南の島のティオ)
- 105) 翌日の『鯨』集合までに則夫は事情を綿密に調べ上げていた。(有川浩・三匹のおっさん)
- 106) 俺を誘っても来られないとわかっていたから、あえてなにも言わずにおいて、驚かせる算段をつけていたんだろう。(三浦しおん・風が強く吹いている)

〈決定〉

- 107) 二日たったら、ぼくがククルイリックの人たちのところへ行って、彼の出発のことを話す。そういう手筈をぼくたちは決めていた。(池澤夏樹・南の島のティオ)
- 108) 由仁はすでに調律師になることを固く決意しているのだと思った。(宮下奈都・羊と鋼の森)

〈情報のやりとり〉

- 109) わたしはきみから例のいきさつを聞いていたから、一応は気をつけていた。(池澤夏樹・南の島のティオ)
- 110) 相変わらず喧嘩腰だったが、これがこの二人には普通なのだと走ももう学んでいたから、放っておく。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 111) あたし、誰かが伝えてると思っていたのよ。だからなにも言わなかったんだけど……(重松清・ビタミンF)

〈物の入手〉

- 112) 代金は現金前払いでもらっている。女は文句を言わずに財布を開き、領収書を受け取る

<sup>15</sup> 「限界」については、須田(2010, pp.139-149)参照。

のもそこそこに、事務所を去った。(三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒)

〈時間の経過〉

113) 昼時をとっくに過ぎていたが、それでも、ずいぶん並んで待った。(佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども)

114) つられて自分の腕時計に目をやると、もう十時を回っている。(恩田陸・夜のピクニック)

〈通過〉

115) あっというまに第一集団と差をつけ、もう滑走路の最初のコーナーを曲がっている。(三浦しおん・風が強く吹いている)

116) ジョータはうれしさと疑問で混乱し、混乱したまま気づかぬうちに、城南文化と前橋工科を完全に抜き去っていたのだった。(三浦しおん・風が強く吹いている)

## 5-2. 結果性 (過去の動作の持つ結果や効力)

次にあげる例では、動作が先行しているという時間的な関係よりも、過去の動作、あるいは、その動作が発話時に残す結果や効力が、現在の場面において、判断や命令などの根拠となるなど、何らかの意味を持っている。たとえば、例 117 では、過去における「雨や風の影響はかまわない」という「アサコさん」の発言を理由として、話し手は「置いておいても大丈夫だ」という判断をしているのである。

結果性は、基準時点が現在に限定されるという点で、先行性と異なっているが、より重要なのは、出来事の前後関係を表す先行性が、ほかの出来事に作用するのに対して、結果性は、判断などに作用するという点である<sup>16</sup>。

また、結果性は、このあとに述べる事実性とちがって、発話時を基点として、先行する動作と、それに基づく判断などがむすびつけられている。そのような意味において、これは、テンス的に現在を表すものと言える。

工藤 (1982) は、本稿の結果性と事実性に対応する〈過去の用法〉と〈記録〉の違いとして、〈過去の用法〉を表す「している」は、「した」に言い換えることができるが、〈記録〉を表す「している」は「した」に言い換えにくいという点を指摘している。それは、いま述べたように、発話時が動作の時間的な位置づけの基点として明確化されている結果性と、そうでない事実性との違いと関連しているのだろう。

<sup>16</sup> 工藤 (1989) では、「話し手の現在の判断を根拠づける (話し手の判断の理由 = 推論の前提となる) 過去の出来事をさしだす場合」と説明されている。

〈判断や意志・命令の引用〉<sup>17</sup>

- 117) あの木はずっとあそこに置いておいても大丈夫だよ。雨や風の影響はかまわないんだって、アサコさんは言っている。(池澤夏樹・南の島のティオ)
- 118) もちろん、佐貫さんも布田さんも、予選会から本格的に取材してくれると言っています。(三浦しおん・風が強く吹いている)
- 119) 陽子は鏡を向いたまま、「わたしだって心配なのよ」と言った。「だから、あの子にも、とにかく一度、彼をお父さんとお母さんに紹介しなさいって言ってるの」(重松清・ビタミンF)
- 120) 「体育館にお連れするよう言づかっているのですが」 来客用の茶色いスリッパを出しながら聞くと、「ええ、今日は体育館のピアノを」(宮下奈都・羊と鋼の森)

〈対象へのはたらきかけ〉

- 121) ほとんど使い道がない死蔵特許に、御社は十数億円をつぎ込んでるんですよ。回収の見込みがあるのなら、教えてくださいよ。(池井戸潤・下町ロケット)
- 122) 我々は貴重な時間を費やしてこれだけの資料を作成してるんですよ。しっかり評価する気がないんなら、止めませんか。迷惑です。(池井戸潤・下町ロケット)
- 123) 大京昭和銀行は、現在では本当にRCA方式に切り替えているようです。(宮部みゆき・返事はいらぬ)

〈情報の入手〉

- 124) 「俺は清田さんに今更だけど色々教わってるよ。ありがたいねえ、ああいう人の存在は」(有川浩・三匹のおっさん)
- 125) むしろ、ある意味最もヤバいおっさんだということは実地で見ている。だとすればあの痴漢野郎が一体どんな目に遭っているやら、——想像は恐すぎて途中で止まった。(有川浩・三匹のおっさん)
- 126) 五年前、結婚十五周年の記念に、父さんが母さんに買ってあげた指輪だ。値段は三十万円だったと聞いている。(宮部みゆき・私はずいてない)

〈経験〉

- 127) 連絡して、どうしたらいいか訊いてみればいいさ。坊ずのお父さんとお母さんは、契約の時に、向こうさんに会ってるだろうし。(宮部みゆき・聞こえていますか)

<sup>17</sup> この言明は、一度、発言すれば、その後その有効性が続くものであり、実際の発言が、その後も何度か行われることもある。



## 5-3. 事実性（過去の事実のさしだし）

事実性は、時間的な前後関係ではなく、おもに、話し手により論理的な因果関係で関係づけられた過去の事実が、シテイル形によってさしだされている<sup>18</sup>。たとえば、例 128 では、「フィリピン政府が 58 年に輸出用バナナの生産拡大を決定した」という過去の事実を根拠の一つとして、「この時点で最初の打診が行なわれた」と判断しているのである（あるいは、例 130 のように、単に他の文のさしだす内容に対して説明をくわえるというものもある）。

結果性と違って、事実性は、結果や効力は関係なく、ただ、過去に生じた事実をさしだしているだけであり、その事実自体が話し手の判断などと論理的に関係づけられているのである。したがって、これは、発話時との関係が弱く、現在を表すというより、判断や評価を表す述語のような、時間的な意味の希薄化した一般的な現在を表すものと言える。

この意味の場合、どんな動作かは関係なく、自動詞でも他動詞でも、この意味を表すことができる。

## 〈歴史的な事実／経歴〉

- 128) かれが『ダバオ開拓記』を私刊した 1956 年には、実は、米国企業の進出が準備されようとしていた。フィリピン政府は、58 年に輸出用バナナの生産拡大を決定している。米国企業とフィリピン政府の「特殊な関係」の慣行を考えると、この時点で最初の打診が行なわれた、という推定は十分成り立つであろう。（鶴見良行・バナナと日本人）
- 129) 蔵原くんは、高校二年のときにインターハイに出場して、好成績を収めてるね。でも、三年になってすぐに退部している。それはどうして？（三浦しおん・風が強く吹いている）
- 130) 小三文をくれないなら、いっそのこと手垢のつかない名前が良いといって、二代目草原亭白馬を襲名。初代白馬は、明治時代の噺家で三十一歳で狂死している。大天才だったという説もあるが、事実はわからない。その名を継いで、自らの力で大きくきらびやかに開花させた。（佐藤多佳子・しゃべれどもしゃべれども）

## 〈日常的な事実〉

- 131) だいいち、彼女、生徒会の選挙にも立候補してるんですよ？もしいじめに遭ってたとしたら、ふつう立候補なんてしないでしょ？（重松清・ビタミン F）
- 132) 「友だちと、なにかあったのかしらね」「そんなことないだろ、この前だってみんなといっしょに『風の子学園』に行ってるんだから」（重松清・ビタミン F）
- 133) 大金を持ち逃げしたといっても、所詮は素人だ。「カリビアン」と芦原の前からは姿をくましても、なじみの美容院のカードには、馬鹿正直に新しい住所を記入している。（宮

<sup>18</sup> この意味は、工藤（1989）では、「b. 「なぜか」「真実かどうか」など、話し手が現在問題とし、聞き手に説明、解答を求めている過去の出来事である場合」と説明されている。

部みゆき・言わずにおいて)

134) 店員は顧客カードをチェックし始める。聡美は手のひらに汗をかいた。

店員の手が止まる。笑顔になる。

「はい、水田様ですね。昨年の夏ごろから何度かカットをなさってますね。いつも『ニューセシル』に」(宮部みゆき・言わずにおいて)

#### 5-4. 先行性、結果性、事実性の諸特徴の比較

以上の、先行性、結果性、事実性について、それぞれの特徴を表にまとめると、次のようになる。もっとも対立的な部分を網掛けにしているが、これを見ると、やはり、先行性と事実性が明確に対立しており、結果性は、事実性と区別されながら、先行性と事実性の中間的なものとして位置づけられることが分かる。

	先行性	結果性	事実性
時間的な前後関係	○	△	×
結果・効力	△	○	×
論理的な関係	×	△	○
テンス	過去・現在・未来	現在	一般的な現在

#### 〈おわりに〉

以上、状態パーフェクトと動作パーフェクトというシテイル形の表すパーフェクト的な意味について、関連する非パーフェクト的な意味にも触れながら、記述的に検討してきた。変化動詞のシテイル形は、一般的な形態論的な意味としては、〈変化の結果の継続〉を表すと規定できるが、文の述語の意味としては、ここにとりあげなかったような特性や関係を表す意味も含めて、非常に多様な意味を表している。しかし、そうした文法的な意味の詳細な記述は、理論的な検討が進んでいると言われるアスペクト研究においても、まだ十分とは言えないだろう。本稿の記述もかんたんなものにとどまっているが、今後のより詳細な記述の方向づけをいくらかでも示せていれば、本稿の目的は達している。

#### 《参考文献》

- 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」 武蔵大学『人文学会雑誌』13-4, 51-88  
 (1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」 『ことばの科学3』, むぎ書房, 53-118  
 呉揚 (2016) 「特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能」 『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第42号』, 65-79

- (2017) 「空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味と機能について—垂直方向の位置  
関係を表す動詞の場合—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第 44 号』, 55-74
- 須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』 ひつじ書房
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語のアスペクトとテンス』 秀英出版
- Nedjalkov, V.P.ed. (1988) *The Typology of Resultative Constructions*, John Benjamins